3

木（国見で取り組む５つの柱）

第３章では、「水」で示した考え方をもとに、国見町が今後取り組んでいく五つの柱を示します。これらの５つの柱は、理念やビジョンを具体的な行動につなげていくための実践の軸となるものです。

この５つの柱は、個別の事業として切り離されるものではなく、相互に関係し合いながら、学びと成長を支える一体的な枠組みを構成しています。

3-1 未来へのはじまりを育む（幼児教育）

子どもたちがこれから歩む未来は、**これまでに多くの人々が経験してきた時代とはまったく違う景色の中**にあります。
変化の速い社会のなかで、自分で考え、仲間と協力し、新しい価値を生み出す力が求められています。
そのはじまりは、幼いころの小さな**「なぜ？」や「やってみたい！」**という心の動きです。国見町は、その芽を大切に育て、子どもたち**一人ひとりが自分らしい未来**を描けるよう、家庭・学校・地域が力を合わせて支えていきます。

子どもも大人も「国見町で育ってよかった」と笑顔で言える町になった。

3-1-1　家庭と手をとりあう子育て支援（保護者との連携）

子どもの成長には、家庭と幼児教育・保育の場が同じ方向を向いて支え合うことが不可欠です。
家庭での小さな気づきや悩みを安心して共有できる関係を築き、保育者と保護者がともに子どもの「できた」を喜び合える町をめざします。
国見町では、相談しやすい環境づくりや情報発信を充実させ、家庭と地域が一体となって子どもたちの育ちを見守る体制を整えていきます。

評価指標

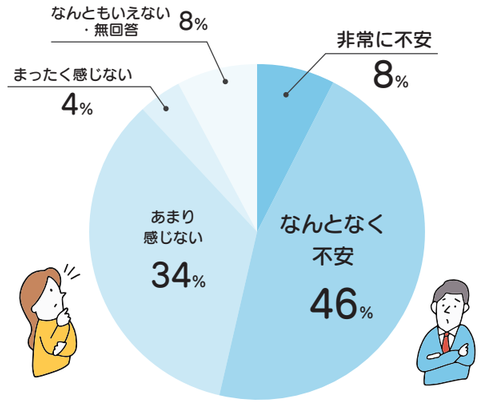
	基準値（2021）	現状値（2024）	目標値（2030）
子育て環境や支援の満足度	未就学児 76.7% 小学生 75.4%	未就学児 79.5% 小学生 74.9%	未就学児 90.0% 小学生 90.0%

（国見町子ども・子育て支援に関するニーズ調査）

現状と課題

保育所や幼稚園では、保護者との連携や相談支援が日常的に行われていますが、仕事や家庭の事情により、園と関わる時間が限られる保護者もおり、子育ての悩みを共有できず、一人で抱え込んでしまうケースもあります。
家庭・保育・地域がつながり、気軽に相談し合える仕組みづくりが求められています。

子育てに関して不安や負担を感じますか？



出典：令和６年度 国見町子ども・子育て支援に関するニーズ調査（国見町）

具体的な取り組み

家庭と保育所・幼稚園をつなぐ「子育て相談体制」の充実

家庭での悩みや不安を気軽に話せる仕組みを整えます。
保育者・子育て支援センター・保健師が連携し、子育ての困りごとに丁寧に寄り添います。
来所相談、電話、オンラインなど多様な方法を用意し、どの家庭も孤立せず、安心して子育てできる環境づくりを進めます。

保護者参加型の学びと交流の場づくり

保護者向け講座やワークショップを定期的に開催し、子どもの発達への理解や家庭での関わり方を学べる機会を充実させます。あわせて、保護者同士が悩みを共有し、支え合える場としても機能させます。学びと交流を通じて、「子育てを一人で抱え込まない」文化を地域に広げていきます。

おたより・デジタル連絡の工夫による情報共有

紙媒体に加え、アプリやメールを活用して子どもの様子や園の活動を適切なタイミングで発信します。家庭でも園での学びが話題となり、親子の会話が広がるよう工夫します。
保護者が安心して預けられ、教育・保育への信頼がさらに深まるよう、情報共有の質を高めていきます。

行事・地域活動への家庭参加の推進

運動会や発表会、地域行事などに、保護者が主体的に関わる機会を増やします。子どもたちの頑張る姿をともに応援し、地域の人々とのふれあいを通して、家庭・所・園・地域の絆を深めます。
参加を「手伝い」ではなく「共に育てる学び」と捉え、保護者が誇りを持てる関わり方を広げます。

3-1-2 考える力・思いやる心・強い体 （知・徳・体）

子どもたちがこれからの時代を生きるうえで大切なのは、知識だけでなく、自ら考え、他者とともに生きる力、そして心身の健康です。
国見町では、学びの中で「考える力（知）」を育み、人との関わりを通して「思いやる心（徳）」を培い、自然や運動を通して「強い体（体）」を養います。
学ぶ・感じる・動くのすべてを大切にし、子ども一人ひとりの可能性を伸ばす教育を進めていきます。

評価指標

NEW

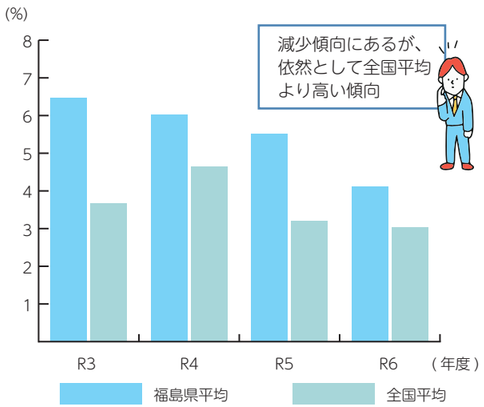
保育所、幼稚園のアクティブプラン※1における評価平均値
（高 4 ～低 1）

基準値 (2021)	現状値 (2025)	目標値 (2030)
---	保育所 2.9 幼稚園 3.3	保育所 3.5 幼稚園 3.5

現状と課題

学び方や人との関わり方が多様化する中で、考える力や感情を調整する力、体力面において、子どもたちの個人差が広がっています。
ICT の普及により利便性が高まる一方、屋外での活動や直接的な関わりの機会が減少する傾向も見られます。
知・徳・体のバランスを保ち、多様な育ちを支える環境づくりが求められています。

肥満傾向児の割合（6 歳児）



出典：令和６年度 学校保健統計調査（文部科学省）

具体的な取り組み

自分で考え、行動できる力を育む学びの推進

子どもたちが自ら考え、工夫し、実行する力を育てます。遊びや生活、身近な体験の中で「どうすればできるか」を考え、試すことを大切にし、知識を覚えるだけでなく、「考える」「伝える」「挑戦する」学びを支える環境を整えます。

思いやりと共感を育む体験活動の充実

地域の人とのふれあい、自然の中での活動、仲間との共同体験を通して、他者を思いやる心や感謝の気持ちを育てます。誰かの役に立つ喜びや、協力して達成する楽しさを感じながら、人とのつながりを大切にできる子どもを育てます。小さな優しさを行動に移せる力を養います。

体力向上と運動習慣づくりの推進

体を動かす楽しさを感じながら、体力や運動習慣を育む取組を進めます。日常的な運動遊びや地域スポーツクラブとの連携を通じて、家庭でも無理なく取り組める活動を広げ、運動を通して集中力や自己肯定感の向上につなげます。

食から育つ、心と体の学び

給食は、子どもたちの健やかな成長を支えるとともに、食を通した学びの機会でもあります。給食の時間を「食を学ぶ場」と捉え、食材の背景や作り手への感謝、望ましい食習慣を学ぶ教育を充実させるとともに、地元食材の活用や家庭との連携を通じて、食への関心を高め、心と体の土台を育てていきます。

用語解説

アクティブプラン ※1
制度や計画を机上にとどめず、実施段階を重視しながら、現場の状況に応じて見直し・改善を行うことを前提とした、実行性を重視する行政計画の考え方。

3-1-3 あそびから学びへ （幼児教育の基盤づくり）

幼児期のあそびは、学びへの第一歩です。感じ、考え、工夫しながら友だちと関わる経験が、これからの学びの土台となります。国見町では、幼児教育・保育の質の向上を図るとともに、家庭や地域と協力しながら、小学校への円滑な接続を進めます。年齢に応じた環境整備や教育内容の充実を進め、子どもたちが安心して学びへ踏み出せる体制を整え、就学前から小学校までの一貫した学びの流れを大切にします。

評価指標

NEW

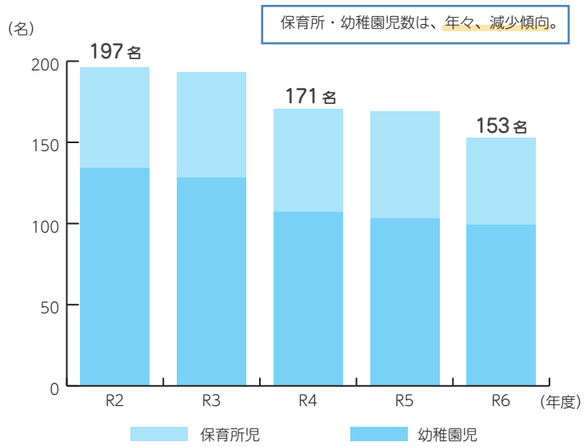
幼保小の架け橋プログラム※1の実施率

---	未策定	100%
基準値 (2021)	現状値 (2025)	目標値 (2030)

現状と課題

国見町では、保育所と幼稚園が地域の子育てを支え、あそびを通した学びが大切にされています。一方で、少子化の進行により子どもの集団規模が縮小するとともに、施設の維持や人材確保が課題となっています。今後は、子どもの数の変化に応じた教育・保育環境の再構築や、持続可能な体制のあり方が問われています。

国見町内の保育所児・幼稚園児数



出典：国見町調査（国見町教育委員会）

具体的な取り組み

幼児教育・保育の一体的な運営体制の構築

保育所と幼稚園の機能を連携・一体化し、子どもの発達や家庭の多様なニーズに応える体制を整えます。教育・保育の両面から子どもを支える仕組みを強化し、少子化の中でも持続可能な運営をめざすとともに、保育と教育の質を確保しながら、安心して預け、学べる環境を築きます。

幼児教育施設の環境整備・機能強化

老朽化した施設の更新や機能改修を進め、子どもたちが安全で快適に過ごせる環境を整えます。遊びと学びが自然に結びつく空間づくりを重視し、園庭や保育室などの整備も段階的に進めるとともに、将来の認定こども園化も見据えた柔軟な施設構成と運営体制を検討します。

幼保小の架け橋プログラムの策定

子どもが安心して小学校生活を迎えられるよう、幼児期の遊びや学びを小学校の学習へとつなぐ取組を進めます。保育所や幼稚園で培った意欲や探究心を生かし、子ども一人ひとりが「できた」「わかった」を感じられる環境を整え、学ぶことを楽しみにできる「心の架け橋」を築きます。

保育・教育人材の確保と専門性向上

少子化の中でも安定した教育・保育の提供を維持するため、人材確保と育成に取り組みます。研修や地域交流の受け入れを通じて若手の成長を支援し、職員間の学び合いを促進するとともに、安心して長く働ける環境づくりにより、教育・保育の質の向上を図ります。

用語解説

架け橋プログラム ※1

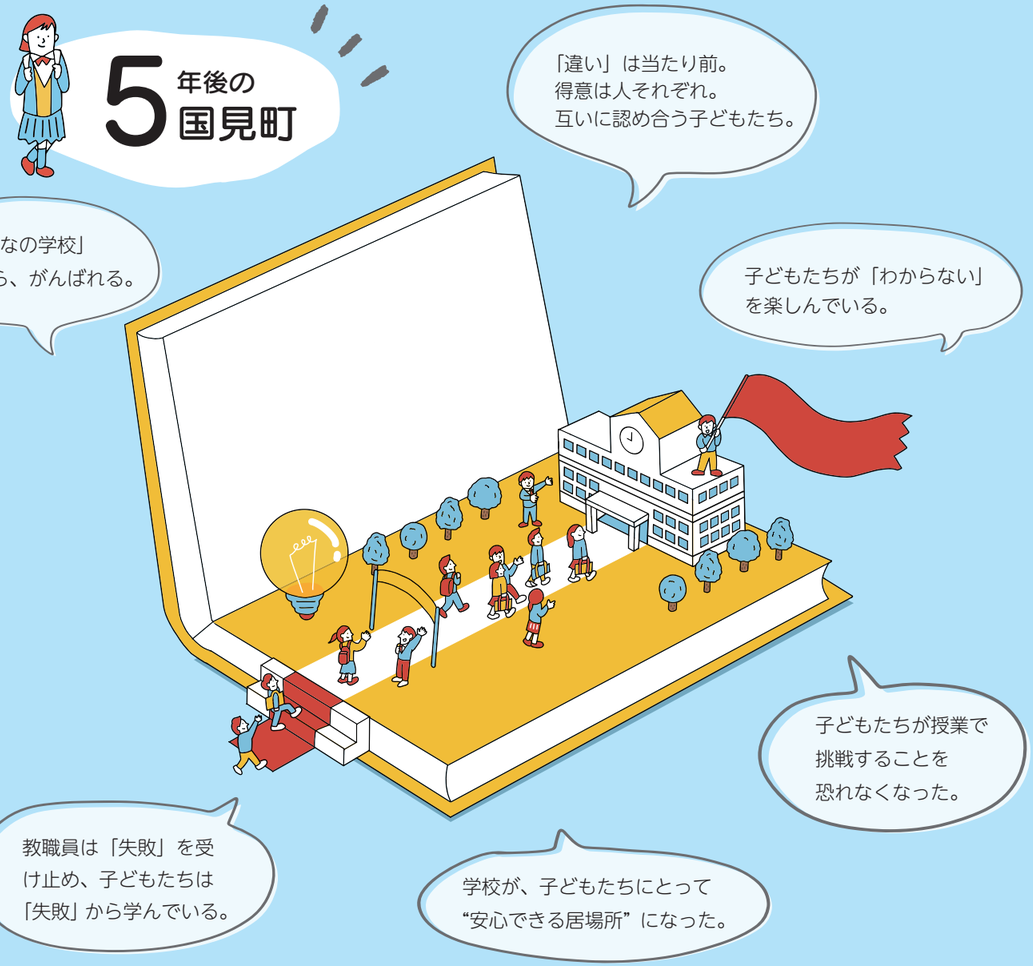
幼児教育から小学校への学びの移行を円滑にするために、幼保・小学校などの関係機関が連携・協働し、計画的かつ体系的に進める取組のこと。

3-2 夢に向かって学ぶ学校
（学校教育）

子どもたちが主役となる国見町の学校では、授業や行事、友だちとの関わりを通して、**挑戦する勇気や思いやりの心**を育んでいます。うまくいかないことや失敗も成長のきっかけとして受け止め、考え、語り合い、助け合いながら前へ進む姿が見られます。

先生たちは、**子ども一人ひとりが持つ力**を信じ、小さな変化を見守り、その歩みに寄り添いながら支えています。

学ぶ喜びと人とのつながりを大切にし、子どもたちが自分らしい夢を描き、**一人ひとりが輝ける学校づくり**を進めます。



国見町では、子どもたちが「夢を語る」ことが特別ではなくなった。

3-2-1 わかる授業で力をのばす （基礎学力・学習指導）

「できた」「わかった」という実感から、学ぶ意欲は生まれます。国見町の学校では、一人ひとりの理解やつまずきに寄り添い、授業づくりの工夫を重ねています。教職員は、子どもの声や表情を手がかりに、問いかけや支援の方法を磨き続けています。学ぶことが楽しいと感じられる授業こそが、子どもたちの未来をひらく原動力です。

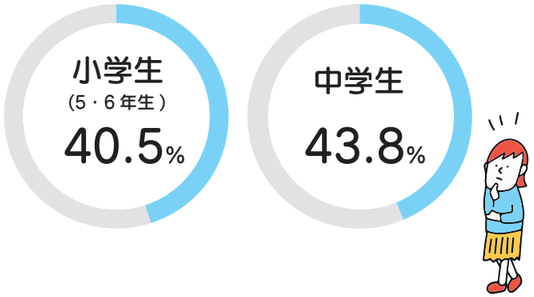
評価指標

	基準値 (2021)	現状値 (2025)	目標値 (2030)
NEW 授業が「よくわかった」という児童生徒の割合（ふくしま学力調査）	---	小6年生 40.5% 中3年生 43.8%	小6年生 70.0% 中3年生 70.0%
体力・運動能力調査合計得点 福島県比較値（福島県体力・運動能力調査）	小6年生 -5.81 中3年生 -3.12	小6年生 --.- 中3年生 --.-	小6年生 ±0.0 中3年生 +1.0

現状と課題

国見町の学校では、少人数の良さを生かした授業が行われ、子どもたちは落ち着いて学びに向かっています。一方で、全国的にも見られるように、学習内容の高度化により、学び方や理解の深まりに個人差が広がっています。
「わかる」「できる」と感じる体験を重ね、自ら考え学ぶ力を育てることが、今後の大きな課題となっています。

「授業がよくわかる」と答えた児童生徒の割合



出典：令和７年度 ふくしま学力調査（福島県）

具体的な取り組み

「学び方」を育てる授業づくりの推進

「できた」「わかった」という瞬間を大切にし、子どもが自分で考え、学びを積み重ねられる授業をめざします。単なる知識伝達ではなく、子どもが「学び方」を身につけられる授業を軸に、主体的で深い学びを育てるとともに、一人ひとりの理解や意見を尊重し、考える力の土台を築きます。

基礎的・基本的な学力の確実な定着

読み・書き・計算などの基礎学力を確実に身につけることを重視します。学習状況を丁寧に把握し、つまずきに応じた支援や補充学習を計画的に行うことで、基礎をしっかりと固め、子どもの学びへの自信を育てます。

多様な支援による“わかる”環境づくり

学習支援員やボランティアの力を生かし、子どもの理解を複数の目で見取る体制を整えます。
支援が必要な子どもへのきめ細かな対応を行い、誰もが安心して学べる教室環境をつくるとともに、教師一人で抱え込まず、学校全体で学びを支える文化を広げます。

日常が育む学びの土台

学びに向かう力は日々の生活から育まれます。家庭学習の習慣化や生活リズムを大切にし、家庭と学校が同じ方向を向いて子どもの成長を支え合います。また、給食の時間では、友だちと同じ食卓を囲み、季節や食材にふれながら食事をとる経験も大切な「学び」の一つと捉え、日常を大切にした教育を進めます。

3-2-2 「問い」から始まる探究と創造の学び

（非認知能力※1・探究的な学び・創造性）

国見町では、子どもたちが自ら問いをもち、考え、試し、語り合う、そうした「問い」から学びが始まるものだと考えています。教える側が答えを示すのではなく、子ども自身の思考や対話を通して、学びが少しずつ深まっていく姿をめざします。その過程で、教科の枠をこえて学びを結びつけながら、感じたことや発見を表現し、形にしていく経験を重ねていきます。こうした探究と創造の積み重ねを通して、未来を切り拓く力を育んでいきます。

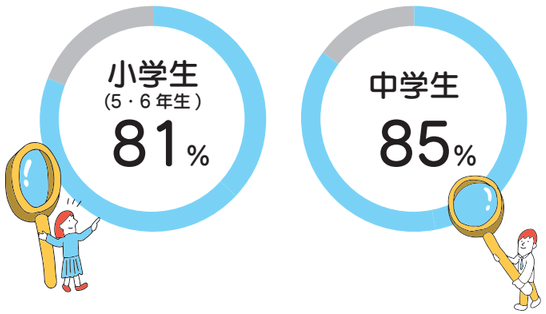
評価指標

	基準値（2021）	現状値（2025）	目標値（2030）
NEW 「探究的な学び」が楽しいと答えた児童生徒の割合（国見町教育委員会アンケート）	---	小6年生 78.7% 中2年生 83.3%	小6年生 90.0% 中2年生 90.0%
「自分に良いところがある」と思う児童生徒の割合（ふくしま学力調査）	小6年生 54.2% 中2年生 77.6%	小6年生 66.7% 中2年生 87.5%	小6年生 90.0% 中2年生 90.0%

現状と課題

国見町では、総合的な学習の時間を中心に、探究的な学びが少しずつ広がっています。
一方で、子どもが自ら問いを立て、学びを深めていく授業はまだ発展途上です。体験活動や地域とのつながりを通した学びを、どのように効果的に行うかが課題であり、教科を超えて学びが連動する仕組みづくりと、挑戦を温かく支える環境づくりが求められています。

「探究的な学習」が「楽しい」と答えた児童生徒数



出典：令和７年度 国見町教育ビジョンに係るアンケート（国見町教育委員会）

具体的な取り組み

非認知能力を育む体験・表現活動の推進

自然体験や地域との交流、発表などの活動を通して、思いやりや協働、やり抜く力を育てます。失敗や挑戦を前向きに受け止める心の育ちを支え、子どもが自分を信じられる環境を整えるとともに、評価は結果だけでなく成長を認める姿勢を大切にします。

問いから創造へつなぐ探究的な学びの推進

子どもたちが自ら問いを立て、調べ、考え、形にする学びを進めます。試行錯誤を通して論理的に考え、表現や発表で自分の考えを形にする過程を大切にし、教科を超えた探究や創造活動を広げることで、学ぶことの楽しさと「自分で考える力」を育てます。

読書で広がる学びの世界

読書は、思考力や想像力を育て、学びを自分の中に根づかせる力となります。
本を通して多様な考え方や生き方にふれ、感じたことを言葉にすることで、思考の深まりと表現の豊かさを育みます。さらに「家読※2」を通して家庭での対話につなげることで、読む・考える・語るを往復しながら、自分の世界を広げ、学びをより確かなものにしていきます。

探究の成果を共有し合う発表・交流の場づくり

探究や創造の成果を学校内や地域で発表し、学びを共有します。「子ども議会」などの発表を通して、考えをまとめて伝える力を育てるとともに、子ども同士の刺激や学び合いを促し、成果を認め合って次の探究へとつなげる文化を育てます。

用語解説

非認知能力※1
テストの点では測れない力で、粘り強さや思いやり、挑戦する意欲、協働する姿勢などを指します。これは学びや人間関係の土台となり、人生を前向きに切り拓く力です。

家読※2
家庭で本を読み合い、感じたことや考えを語り合う取組です。思考力・表現力・対話力を育て、学校と家庭の学びをつなぎます。

3-2-3　すべての子どもを支える安心の学校づくり

（不登校・いじめ・多様性）

子どもたちが安心して学校生活を送り、一人ひとりが自分らしく学び育つことは、教育の根幹です。いま、学校にはさまざまな背景や個性をもつ子どもたちがいます。誰もが孤立せず、支え合える環境を整えることが必要です。不登校の子どもには柔軟な学びの機会を、特別な支援を必要とする子には適切なサポートを行い、いじめや不安を未然に防ぎ、子どもたち同士が互いを尊重し合える文化を育てていきます。すべての子どもが「ここにいていい」と感じられる学校をめざします。

評価指標

いじめは、どんなことがあってもいけないと思う子どもの割合

（全国学力・学習状況調査）

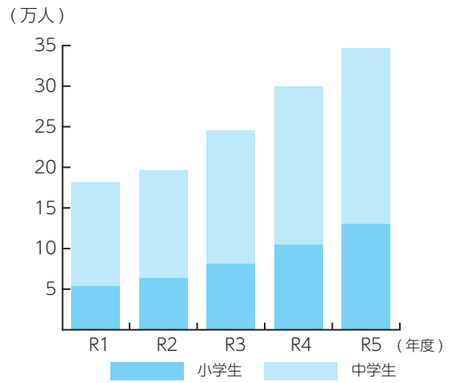
基準値（2021）	現状値（2025）	目標値（2030）
小6年生 93.2% 中3年生 94.2%	小6年生 95.2% 中3年生 93.4%	小6年生 100% 中3年生 100%

現状と課題

全国的に不登校や発達に特性のある子どもが増加傾向にあり、一人ひとりに応じた支援の充実が求められています。

しかし、教職員の人員や専門性には限りがあり、対応が個々の努力に依存している現状があります。また、いじめや人間関係の不安など、子どもが安心して過ごせる環境づくりも重要となっており、これらは国見町にとっても同様の課題です。学校・家庭・地域が連携し、すべての子どもが自分の居場所を感じられる学校づくりが必要です。

全国の不登校児童生徒数の推移



出典：令和５年度　児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果（文部科学省）

具体的な取り組み

多様性を尊重する学校づくり（インクルーシブ教育※1）

子どもたちが互いの違いを認め合い、支え合いながら学べる学校づくりを進めます。障がいの有無や特性、背景にかかわらず、すべての子どもが学びの輪の中で成長できるよう環境を整え、特別支援教育や通級、交流学習を通して、思いやりと理解を育むインクルーシブ教育を推進します。

不登校児童生徒への学びとつながりの支援

国見町教育支援センター「ステップ」や関係機関と連携し、不登校の子どもが孤立せず、学びと社会とのつながりを保てるよう支援を進めます。家庭訪問やICTを活用した支援など、多様な手段で一人ひとりに合った学びを支えるとともに、「学校に戻すこと」だけにとらわれず、子どもの心に寄り添う支援を進めます。

いじめ防止と安心できる学級経営

いじめを未然に防ぐための教育を重ね、安心して過ごせる学級づくりを進めます。日常的な対話を大切にし、子どもが安心して思いを話せる関係を築くとともに、早期発見・早期対応を徹底し、信頼と安全を土台とした学校運営を行います。

教職員・関係機関との連携強化

多職種が協働して情報を共有し、一人ひとりに最適な支援を検討します。学校だけで課題を抱え込まず、家庭、地域、福祉、医療などと連携し、子どもを「地域全体で育てる」という意識のもと、支援の質を高めます。

用語解説

インクルーシブ教育※1

障がいや障壁の有無にかかわらず、すべての子どもが安心して自分らしく過ごし、互いの違いを受け入れ、認め合いながら共に学ぶ教育です。

3-3 学ぶよろこびを一生涯
（生涯学習・文化スポーツ）

学ぶことは、子どもから大人まで、人生を豊かにし、日々の暮らしを前向きにしてくれる力があります。

国見町では、生涯学習や文化・芸術、スポーツなど、多様な体験を通して、だれもが**自分らしく成長できる環境づくり**を進めています。

こうした考え方のもと、生涯にわたる学びを、年齢や立場で区切るものではなく、高校生･大学生･若者世代を含め、全ての人々が**地域や社会と関わりながら学び続けていく「一体的な学び」のあり方**として捉えています。

身近な場所で生まれる小さな「知りたい」「やってみたい」を大切にし、**いくつになっても学ぶよろこびを感じられる**、そんな温かいまちをめざします。

学びがまちをやわらかく包む。文化が日々を彩る。
スポーツが笑顔をつなぐ。

3-3-1　だれもが学びを楽しめる町（生涯学習）

学ぶことは、年齢に関係なく自分を豊かにします。趣味や教養を深めること、資格取得を目指すこと、地域の活動に参加することなど、それぞれの学びが国見町の未来を形づくっています。
国見町では、生涯学習の機会を広げ、だれもが気軽に学びを楽しめる環境を整えます。学ぶ人が増えるほど、教える人も増え、町全体がともに育ち合う「学びの輪」が広がっていきます。

評価指標

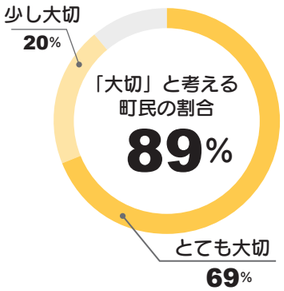
	基準値（2021）	現状値（2025）	目標値（2030）
NEW くにみ観月台カレッジの入校者数	---	206人	206人
図書館の書籍貸出冊数（100人当たり）	160冊	175冊	200冊

現状と課題

国見町では、地域講座や自主サークルなど、多くの人の手によって学びの場が育まれてきました。一方で、人口減少や高齢化により活動の担い手が限られ、次の世代へどのように学びをつないでいくか、また、新たに活動を立ち上げる団体への支援が大きな課題となっています。また、若い世代や子育て世代が参加しやすい機会が十分とはいえず、世代をこえてゆるやかにつながる場づくりが求められています。

学んでいる / 知りたいと思うことはありますか？

生涯学習についてどう思いますか？



出典：令和７年度 国見町教育ビジョンに係るアンケート（国見町教育委員会）

具体的な取り組み

図書館を軸にした“まちの学び場”づくり

図書館を、町の学びと交流をつなぐ拠点として位置づけます。テーマ展示や読書会に、町の施策や地域活動と関連したテーマを取り入れ、住民が身近なまちの課題や魅力に触れられる仕掛けを広げます。地域住民との連携による小さな企画も育て、図書館を起点に、まち全体が学びの舞台となるような環境をめざします。

くにみ観月台カレッジで広がる大人の学び

くにみ観月台カレッジを、大人が関心のあるテーマを深く学べる場としてさらに育てます。専門講座だけでなく、地域や暮らしに根ざした題材も取り上げ、町民が自分のペースで学び続けられる環境をつくるとともに、図書館との連携や講座内容の紹介など、町全体の学びとつながる仕掛けを生み、学びの広がりを支えます。

大人の探究を応援する講座・活動の推進

大人も子どもに負けず、自分の「好き」や「気になる」から問いを立て、小さく深く学びを進められる探究活動を応援します。少人数の学習会や対話の場を整え、挑戦しやすい雰囲気をつくるとともに、大人の探究を蓄積し、成果を共有できる場をつくることで、その姿が子どもたちの学びへの刺激となり、「学びの循環」が町に根づいていきます。

サークル・自主活動を支える“相談サポート”の充実

「活動を始めたい」「仲間を見つけたい」「場所に困っている」といった町民の声に気軽に応じられる相談体制を整えます。既存の自主サークルや町民講座を安心して続けられるよう、情報提供や運営サポートを行い、大人が自分らしい学びを無理なく続けられる環境を広げ、小さな活動がまちの学び文化を支える土台となることをめざします。

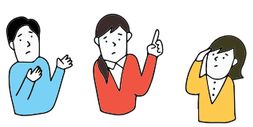
3-3-2　文化と芸術で心豊かに（芸術文化活動・体験）

芸術文化は、私たちの暮らしに彩りを与え、心を動かす力を持っています。国見町では、地域に根ざした芸術文化活動や体験を通じて、だれもが豊かな時間を味わえる環境づくりを進めています。
伝統を受け継ぎながら新しい表現に触れたり、身近な場所で創作を楽しんだりすることで、人と人とのつながりが生まれ、まちに温かな文化が育っていきます。

評価指標

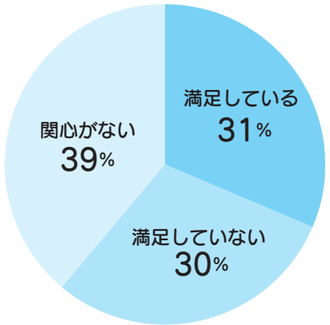
	基準値（2021）	現状値（2024）	目標値（2030）
観月台文化センターの利用者数	37,083人	42,543人	45,000人
町文化団体連絡協議会加盟会員数	690人	569人	700人

現状と課題



国見町では、地域の文化団体の活動が、まちの魅力や人とのつながりを支えてきました。
しかし、人口減少や高齢化により参加者や担い手が限られ、新たな活動を始めることや既存活動の継続、次世代への継承が課題となっています。また、文化や芸術に触れる機会が固定化し、若い世代や子育て世帯が参加しにくい状況も見られます。だれもが気軽に文化を楽しみ、表現できる場を広げていくことが求められています。

お住まいの地域での文化的な環境に満足していますか？



出典：令和５年度　文化に関する世論調査（文化庁）

具体的な取り組み

観月台文化センターを活かした文化創造の場づくり

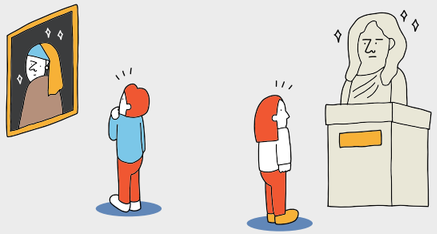
観月台文化センターを、町の芸術文化が集まる中心として活用します。展示やコンサート、発表会だけでなく、地域団体や学校との連携による企画を広げ、だれもが気軽に文化にふれ、表現できる機会を増やします。町民の創造活動を支えるとともに、新たな担い手が育つ場として機能させます。

身近な芸術体験を広げる講座・ワークショップ

くにみ観月台カレッジと連携しながら、音楽・絵画・工芸など、身近な芸術にふれられる講座を充実させ、子どもから大人まで表現の楽しさを味わえる機会を増やします。

世代をつなぐ文化活動への参加支援

若い世代や子育て世帯も参加しやすいよう、短時間の体験会や家族向け企画を増やし、年齢を問わず文化にふれられる場をつくります。
世代をこえた活動を通じて、まちの文化に新しい担い手が生まれる流れを育てます。



芸術文化活動の支援

まちづくり部局や関係機関と連携しながら、地域のアーティストや若手クリエイターと協働した芸術文化活動を支援します。アート展示や創作活動、発表の場を通して、町民が文化にふれ、表現できる機会を広げます。

3-3-3　スポーツで健康とつながりを　（生涯スポーツ・健康づくり）

朝のウォーキングや放課後のグラウンド、休日の公園など、体を動かす日々の営みが人と人をつなぎ、笑顔を生み出します。
スポーツは、競うだけでなく、支え合い、励まし合って心と体を健やかに保つ「暮らしの文化」です。
国見町では、子どもから高齢者まで、だれもが気軽に楽しめる生涯スポーツの環境づくりを進め、スポーツを通して健康を守り、仲間と笑い合える時間がまちの日常となる未来をめざします。

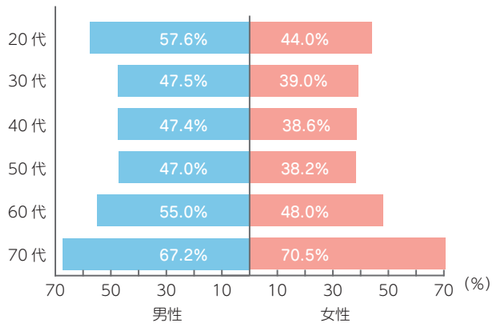
評価指標

	基準値（2021）	現状値（2025）	目標値（2030）
社会体育施設の利用者数	62,552人	45,972人	65,000人
町体育協会加盟会員数	608人	826人	850人

現状と課題

国見町では、地域スポーツ団体や学校の活動が、住民の健康づくりや交流の場として大きな役割を担ってきました。
一方で、人口減少や働き方の変化により参加者が限られ、運動の機会が一定の層に偏りやすい状況があります。働く世代や運動が苦手な人も参加しやすい機会を広げ、無理なく体を動かせる環境づくりが求められています。

福島県における週１日以上のスポーツ実施率（性年代別）



出典：令和６年度　スポーツ実施率調査（スポーツ庁）

具体的な取り組み

ももたんスポーツクラブ（総合型地域スポーツクラブ）の機能強化

ももたんスポーツクラブを「世代を超えたスポーツ拠点」として構築します。既存団体と連携しながら、子どもから高齢者まで同じ空間で多様な運動に親しめるプログラムを整備するとともに、指導者・ボランティアなどの人材育成を進め、生涯スポーツの中心として地域に根差したスポーツ環境づくりを進めます。

健康づくりスポーツプログラムの拡充

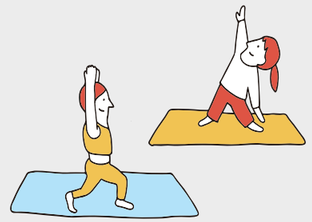
町民一人ひとりが無理なく続けられる運動教室を拡充します。保健部門と連携し、ウォーキングやヨガ、筋トレなど、年齢や体力に応じたメニューを用意し、「楽しく続ける」をキーワードに生活習慣病の予防を進めます。

スポーツ少年団と学校・地域の連携強化

スポーツ少年団活動を通じて、学校・家庭・地域が一体となって子どもの育ちを支えます。技術だけでなく、礼節やチームワーク、地域への愛着を育む指導を推進し、指導者・保護者・地域住民の協働体制を整えます。

スポーツ推進員の育成

地域でスポーツ活動を支える人材を育てます。大会や教室の運営支援、健康指導など役割に応じた研修を実施し、支える人も主役になれる環境を整えることで、スポーツを通した地域の誇りと一体感を育みます。



3-4 地域が先生、まちが教室
（地域連携・教職員支援）

国見町の子どもたちは、まちの中で多くの“**先生**”と出会っています。地域の人の話、祭りの準備、自然の中での体験――そのすべてが、教室だけでは学べない“**生きた学び**”です。
地域には、子どもたちを見守り、導き、支えてくれる大人たちがいます。
学校もまた、地域の一員として、**互いに学び合う関係**を築いていきます。
国見町は教職員が安心して力を発揮できる環境を整え、地域とともに育つ学校づくりを進めます。
そして、町に息づく歴史や文化、祭りや伝統を未来へつなげ、「**学びと暮らしがつながるまち**」をめざします。

5年後の国見町

地域の大人たちは
私たちを優しく見ててくれている。
「ここにいていいんだ」と感じる。

地域行事や伝統文化の活動に
子どもたちが参加し、
笑顔があふれている。

学校の授業に地域の人が
当たり前のように
参加している。

スポ少のコーチたちは
僕を本気で叱ってくれる
だから本気で頑張れる。

部活動の地域展開で、
地域クラブが子どもと大人の
新しい交流の場になった。

先生たちが授業や
子どもとの関わりに
じっくり向き合えている。

「地域みんなで育てる」という考えが国見町の文化として定着した。

3-4-1　みんなで子どもを育てる仕組み

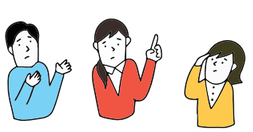
（コミュニティ・スクール※1、地域学校協働本部※2、部活動地域展開）

子どもたちを育てるのは学校だけではありません。地域の人が見守り、語り、関わることで、子どもたちは「まちの中で生きる力」を育んでいます。コミュニティ・スクールや地域学校協働本部の活動を通じて、地域の知恵や経験が学校教育に生かされ、授業や行事も「まちぐるみの学び」として広がっています。さらに、部活動の地域展開など、地域と学校の新しい関係も生まれています。子どもを中心に、学校・家庭・地域が一つになって支え合う、「みんなで育てる町」をめざします。

評価指標

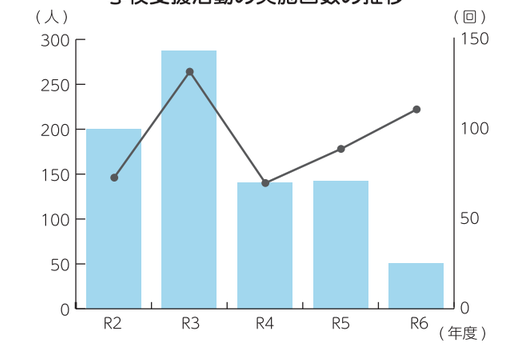
	基準値（2021）	現状値（2024）	目標値（2030）
NEW 地域学校協働活動の実施回数	---	111回	125回
NEW 地域学校協働活動参加者の延べ人数	---	276人	350人

現状と課題



コミュニティ・スクールや地域学校協働本部の導入により、学校と地域が連携して子どもを支える仕組みが整いつつあります。
一方で、活動を支える人材の偏りや担い手不足、世代交代といった課題もあります。関わりを一部の人に頼るのではなく、町全体で子どもを見守り育てる仕組みづくりが求められています。

学校ボランティア登録者数と
学校支援活動の実施回数の推移



出典：国見町調査（国見町教育委員会）

コミュニティ・スクール（学校運営協議会）の機能強化

国見学園コミュニティー・スクール委員会を中心に、学校と地域が対話しながら教育方針を共有します。地域代表や保護者、事業者などが協働し、学校運営への参画を拡大。「学校は地域のもの」という意識を広げ、地域の知恵と力を学校教育に生かします。

地域学校協働本部の体制充実

コーディネーターの配置や研修を充実させ、学校と地域をつなぐ仕組みを強化します。
授業支援や安全見守り、キャリア教育などの活動を支え、学校ごとの特色を活かした協働体制をつくります。また、生徒が「まちづくり」に接する機会を設け、地域の一員として自らの手で未来を考え、行動する経験を積めるようにします。

部活動の地域展開

部活動の地域展開を通して「学びの場」を学校から地域へ広げます。生徒が地域の人々と出会い、多様な活動や新しい表現に挑戦できる環境を整えます。

公営塾「放課後塾ハル」

国見町では、放課後の時間を活かした学びの場として公営塾「放課後塾ハル」を展開しており、子どもたちの興味を出発点に未来を考える探究活動を行っています。この取組を放課後支援の重要な柱として位置づけ、探究のための体制整備、スタッフ育成、地域との連携強化を進め、子どもが安心して未来を描ける学びの環境を継続的に育てていきます。

コミュニティ・スクール ※1
学校運営に地域住民や保護者が参画する制度。学校と連携して学校方針や教育活動を共に考え、地域と一体で子どもを育てる仕組みです。

地域学校協働本部 ※2
地域住民・団体が学校と協働し、学習支援や行事支援を行う拠点。ボランティアや人材を組織化し、学校教育・地域活動を支える地域側の体制です。

3-4-2　教職員のやりがいと成長（働き方改革・研修）

子どもたちと向き合い、日々の成長を支える教職員の姿は、まちの誇りであり、教育の力そのものです。その情熱は、安心して続けられる環境の中でこそ輝きます。国見町では、教職員が過度な負担を抱えることなく、子どもたちと丁寧に関われる働き方をめざします。業務の効率化や分担の見直し、ICTの活用を進めることで「創造的余白の時間 ※1」を生み出します。
教える人が笑顔で働けること ―― それが、子どもの笑顔につながる町をつくります。

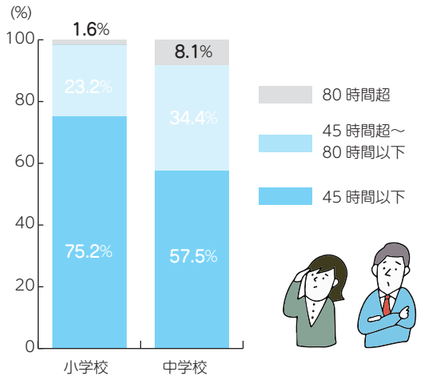
評価指標

	基準値 (2021)	現状値 (2025)	目標値 (2030)
NEW 全ての教職員の時間外在校時間数が 45 時間以下の学校の割合	---	0%	100%
NEW「仕事にやりがいを感じている」と回答する教職員の割合	---	未測定	100%

現状と課題

教職員は、子どもの成長を支える重要な役割を担う一方で、授業準備や行事、保護者対応、事務作業など多様な業務に追われ、時間的・精神的な負担が大きい状況にあります。
この構造的課題は全国的な課題であり、国見町においても同様です。少人数体制や複数業務の兼務が多く、授業改善や児童生徒への丁寧な関わりの時間を確保しづらい要因にもなっています。

教職員の時間外在校時間の割合



出典：令和６年度 教育委員会における学校の働き方改革のための取組状況調査（文部科学省）

具体的な取り組み

教職員の業務改善・効率化推進

校務分掌や会議体制の見直し、校務支援システムや ICT の活用により、教職員の業務負担を軽減します。事務作業の効率化を進めることで、子どもと向き合う時間を確保し、教育活動の質を高めます。また、学校間での好事例共有を通して、現場主導の改善文化を育てます。

教職員の働き方改革推進計画・働き方改革パッケージの策定

教職員の長時間勤務解消と業務の最適化を図るため、町独自の「働き方改革推進計画」を策定します。勤務実態の分析をもとに、校務分掌や会議の見直し、ICT 活用の方針を体系化し、教育現場に即した具体策をまとめた「働き方改革パッケージ」として実行します。

教職員の成長支援・リフレクション研修

若手からベテランまでが教職員が互いに学び合う研修体制を整えます。校内研究や授業公開に加え、実践を振り返るリフレクションの機会を増やし、教師が自ら学び続ける文化を醸成します。

外部人材の活用

教職員の負担軽減と教育活動の充実を目的に、事務補助員や部活動指導員、学習支援員など外部人材の活用を進めます。学校運営の効率化と教育の多様化を両立します。

教職員メンタルヘルス・相談体制の充実

教職員が安心して働けるよう、心身のケアを支える仕組みを整えます。定期的な面談や外部カウンセラーとの連携を強化し、ストレスや悩みを早期に相談できる環境をつくります。

創造的余白の時間 ※1
授業改善や教育活動の改善、新たな発想を生み出すために意図的に確保された時間で、働き方改革によって業務の効率化等により創出された時間を指します。

3-4-3　地域の文化を未来へ（国見学・歴史・文化財）

国見町には、長い年月をかけて育まれた地域の文化があり、固有の歴史を反映した文化財として残されています。それらは、先人たちの想いや暮らしの知恵が息づく、町の宝物です。
これらを受け継ぎ、次の世代へと伝えていくことは、町の誇りを未来につなぐ大切な学びです。
地域の人々が継承の担い手となり、子どもたちがその魅力を体感することで、「ふるさとを愛し、語れる町」をめざします。

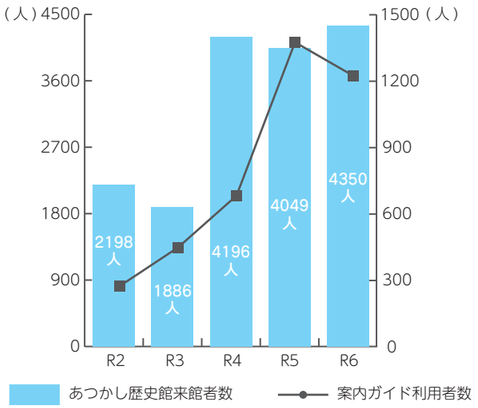
評価指標

	基準値（2021）	現状値（2025）	目標値（2030）
地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う児童生徒の割合（全国学力学習状況調査）	---	小6年生 64.3% 中1年生 51.1%	小6年生 75.0% 中1年生 70.0%
国見町文化財センター あつかし歴史館利用者数	2,100人	4,350人	3,000人

現状と課題

国見町では、歴史ある史跡や神楽などの文化財が今も地域で大切に守られています。
一方で、担い手の高齢化や減少が進み、保存・継承が難しくなっています。
さらに継承の輪を広げるためには、教育普及や発信の取組も不可欠です。子どもたちが地域の文化にふれ、誇りとして受け継げるよう、学校・地域・行政が一体となった仕組みづくりが求められています。

あつかし歴史館と案内ガイド利用者の推移



出典：国見町調査（国見町教育委員会）

具体的な取り組み

「国見学」の再構築と探究的学びへの発展

これまで地域の歴史や文化を理解する取り組みとして親しまれてきた「国見学」を、時代に合わせて再構築します。過去を学ぶだけでなく、国見の“いま”や“これから”を子どもたちが考え、地域の課題や魅力を自分ごととして探究・発信できる学びへと発展させます。

文化財の保存と活用推進事業

史跡・建造物・美術工芸品・古文書・民俗文化財など、多様な文化財の保存を計画的に進めるとともに、公開講座や現地見学、デジタルアーカイブ化を通して地域の魅力を広く発信します。守るだけでなく「活かす文化財」「学びのコンテンツ」として、教育に結びつけます。

民俗芸能の担い手育成支援

町内の保存・継承団体と連携し、若い世代が継承活動に参加できる仕組みを整えます。神楽・お囃子体験などのプログラムを学校や地域で実施。伝統を“見る”から“参加する”へと広げます。

保存継承団体等への支援・住民協働

地域で活動する保存会や文化財所有者、研究・活動に関わる地元団体の支援を充実させます。
それら、各団体と町が参加する歴史まちづくりフォーラムの枠組みを活かして、協働による情報発信・人材育成に繋げます。
上記の取組を通じて、地域の絆と誇りを育て、文化を守る人・支える人をつなぎ、継承の輪を広げます。

3-5 ICTで広がる学びの町
（ICT 教育・環境整備）

国見町では、ICT を単なる便利な道具としてではなく、子どもたち**一人ひとりの学びを支える土台の一部**として捉えています。タブレットを活用した授業やデジタル教材の利用など、新しい学びの形は、教室や学びの場の風景として定着しつつあります。こうした学びが日常として続いていくためには、授業の工夫だけでなく、教室や校舎、学習空間といった「学びを受け止める場」そのものも重要です。

国見町は、**未来の学びの可能性を支え続ける**教育環境の姿を描いていきます。

“デジタルに強い町くにみ”が、若者にも誇れるブランドとして根づいた。

3-5-1　授業・探究で生かす ICT （ICT 活用・個別最適な学び）

ICT は、子ども一人ひとりの学びを深め、広げるための大切な道具です。
国見町では、タブレットやデジタル教材を活用し、自分のペースで学び、仲間と考えを共有する授業を進めていきます。探究学習やグループ発表などを通して、ICT は「考える力」と「つながる力」を育てる授業へと進化しています。学び方が変わることで、教室の風景も変わっていきます。

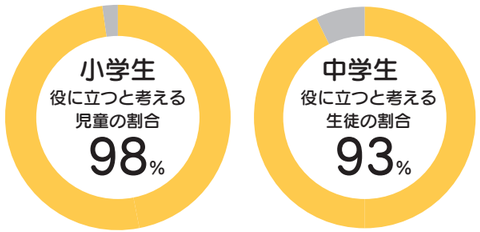
評価指標

	基準値 (2021)	現状値 (2025)	目標値 (2030)
NEW ICT を使った授業が「好き」と答えた児童生徒の割合（国見町教育委員会アンケート）	---	小6年生 91.5% 中3年生 ---	小6年生 95.0% 中1年生 95.0%
NEW ICT 機器が「役に立っている」と答えた児童生徒の割合（国見町教育委員会アンケート）	---	小6年生 100% 中3年生 88.5%	小6年生 100% 中3年生 100%

現状と課題

国見町では、GIGA スクール構想により一人一台端末が整備され、ICT を活用した授業が広がり始めています。一方で、教職員の活用スキルや授業デザインには差があり、活用そのものが目的化してしまう場面も見られます。
子ども一人ひとりの学びに合った使い方を探り、“学びが変わる”実感をもてる授業づくりが課題です。

ICT 機器を使った授業は役に立っていますか？



出典：令和７年度 国見町教育ビジョンに係るアンケート
（国見町教育委員会）

具体的な取り組み

個別最適学習支援システムの導入・運用

AI ドリルやデジタル教材を活用し、児童生徒一人ひとりの理解度や進度に応じた学習支援を行います。ICT の持つ特性を生かし、学習履歴を教員が分析することで、つまずきや得意分野を正確に把握し、指導計画の改善や個別フォローにつなげます。

教職員 ICT 活用授業研究会の実施

ICT を活用した授業改善を進めるため、町内の教職員が互いの実践を共有・協議する研究会を実施します。授業動画や教材例を共有し、学校間でのノウハウを蓄積。ICT 活用に不安を感じる教員へのサポート体制を整えるとともに、町全体の授業力を高めます。

探究型 ICT 学習の推進

地域課題や身近なテーマを題材に、ICT を活用した探究学習を推進します。調査・分析・整理・発表までをデジタルで行うことで、情報を整理し発信する力を育てます。オンライン発表会や地域連携型の授業も展開し、子どもたちが「自分の学びが町とつながっている」と実感できる学びを目指します。

オンライン協働学習と校外連携の推進

他校や地域、海外の学校とオンラインでつながり、共同研究や文化交流を行います。異なる価値観や背景をもつ仲間と意見を交わすことで、対話的な学びと多様性への理解を深めます。
ICT を通じた“地域を越えた学びの友達”ができることで、子どもたちの視野と可能性を広げます。

3-5-2　町全体で支えるデジタル環境 （端末・ネットワーク・教材整備）

安心して ICT を活用できる環境づくりは、学びの土台です。国見町では、この環境を「インフラ」と捉え、一人一台端末の更新や校内ネットワークの高速化を進め、教室のどこからでも快適に学べる環境を整備していきます。

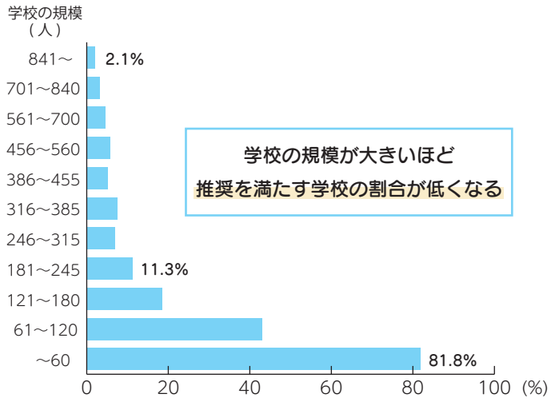
評価指標

指標	基準値 (2021)	現状値 (2025)	目標値 (2030)
NEW ネットワーク速度が文部科学省推奨水準を満たしている学校の割合（国見町教育委員会アンケート）	---	0%	100%
NEW 家庭内でインターネットの使い方についてルールを決めている割合（ふくしま学力調査）	---	小6年生 57.1% 中2年生 46.9%	小6年生 70.0% 中2年生 70.0%

現状と課題

一人一台端末の導入により、学びの環境は想像以上に大きく進展しました。しかし、ネットワークの安定性や機器更新の費用負担、教材やツールの整備など、持続的な運用には課題があります。
また、学校だけでなく家庭や地域が ICT を支える仕組みづくりも必要です。
デジタル基盤の強化を町全体で支えることが必要とされています。

文部科学省の推奨通信環境を満たす学校の割合



出典：令和５年度 学校のネットワークの現状調査（文部科学省）

具体的な取り組み

学校内 Wi-Fi 高速化・セキュリティ強化事業

すべての教室において、授業で支障が生じないよう、快適かつ安全にインターネットを利用できる環境を整備します。あわせて校内の通信設備を更新し、ICT を活用した学習の広がりに安定的に対応する環境を整えることで、安心して ICT を活用できる学びの空間の実現を目指します。

ICT 支援員 ※1 の常駐化とサポート体制強化

各学校に ICT 支援員を常駐化し、日常的な機器トラブル対応や授業支援を行います。教員が安心して ICT を活用できる環境をつくることで、授業の質向上と活用率の向上を図ります。また、支援員を地域人材として育成し、継続的なデジタル支援体制を確立します。

一人一台端末の更新・再整備プロジェクト

令和 8 年度の端末更新を見据え、機種選定・運用方針・更新サイクルを早期に整備します。
端末の性能と操作性を両立させ、授業・家庭学習の双方で活用できる環境を確保。持続可能な更新モデルを構築し、ICT 教育の安定的な基盤を整えます。

情報モラルとメディアコントロール ※2

デジタル社会を生きる力は、単に使いこなす技術だけではありません。国見町では、情報を正しく理解し、考え、選ぶ力を育てる教育を進めます。SNS やネット情報の扱い方、時間との向き合い方を学び、家庭や地域と連携して “安心して ICT を活かす力” を育みます。

ICT 支援員 ※1
学校現場で教職員や児童生徒を支援する専門人材です。機器の操作支援や ICT 活用の助言などを行い、教育の質向上に貢献します。

メディアコントロール ※2
スマートフォンや SNS、動画、ゲームなどのデジタルメディアについて、利用時間や内容を自ら考え、調整しながら活用する力のことです。

3-5-3　教育環境の充実（環境整備）

子どもたちの学びを支えるためには、教育の内容や方法だけでなく、日々を過ごす学校や地域にあるさまざまな学びの場を充実させることが重要です。
国見町では、学校をはじめとする教育環境を、安全性や快適性に配慮しながら整備し、学びを深めるための基盤として充実させていきます。

評価指標

NEW

学校の施設は「使いやすい」又は「普通」と答えた児童生徒の割合

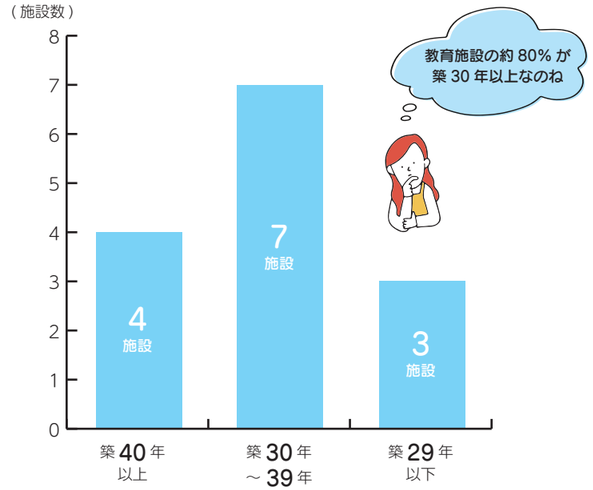
（国見町教育委員会アンケート）

基準値（2021）	現状値（2025）	目標値（2030）
---	90.4%	95.0%

現状と課題

国見町内の教育施設の多くは、整備から 30 年以上が経過しており、安全性や快適性の確保に加え、施設の使い方や整備のあり方について計画的な見直しが求められています。
また、学び方が多様化する中で、従来の施設の使い方が現在の学習活動に十分対応できていない場面も見られます。
教育環境を今の時代に合った形で捉え直していくことが必要です。

国見町の教育施設の築年数（令和 8 年 4 月 1 日現在）



出典：国見町公共施設等総合管理計画（国見町）

具体的な取り組み

学びを支える教育施設の安全性・快適性の確保

子どもたちが安心して学びに向かえるよう、教育施設の安全性や衛生面、快適性の確保を基本とした環境づくりを進めます。あわせて、通学の安全を含めた学習環境全体に目を向け、子どもたちが安心して学校生活を送ることができる環境の確保に取り組みます。

学びの変化に対応した教室の使い方

学び方の多様化に対応するため、教室や特別教室、共用空間などの使い方を見直し、学習活動に応じて柔軟に活用できる環境づくりを進めます。教室を固定的に捉えるのではなく、学びを深める「場」としての活用を意識した工夫に取り組みます。

施設を活かした学びの環境づくり

観月台文化センターを、町全体に広がる学びを支え、つなぐ拠点として位置づけ、学びの環境づくりを進めます。学校での学びと地域での学びが、この拠点を介して重なり合うことで、子どもから大人までの学びが連続していく環境を整えます。

将来を見据えた持続可能な教育環境の整備

人口減少や今後の教育の姿を見据え、教育施設の使い方や整備のあり方の検討を進めます。子どもたちや大人が安心して学び続けられるよう、学習機会の確保の観点からも支援を進め、将来にわたって学びが続くことのできる環境整備に取り組みます。